
ネガティブハネムーン

MONDOERA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネガティブハネムーン

【Zコード】

Z8522P

【作者名】

MOZDOERA

【あらすじ】

世界生成の際、正の気は上に溜まり、負の気は下に溜まった。そして、その2つの気がそれぞれの世界を創った。正の気により創られた世界の一つ、『夢幻界』である事件が起ころうとしていた。

登場人物紹介（前書き）

人生初のオリジナル小説です。拙い小説ですが、宜しくお願ひします。

登場人物紹介

・コルト・レイフィール

フォトス村に住み、その村にある『フォトス学園』に通う小等部4年生。元気な10歳の女の娘。頭脳はあまり良くないが、気さくで暢気な為、友人は沢山いる。図書室でウォルネ・アクリウスと出会い、話をしてから親友になつた。晶術においては、平均よりやや下であり、学園の教科書通りの電気系の晶術を使うが、下級術しか使えない。しかし、小等部の4年生の生徒ではだいたい下級術しか使えないでの、平均的な成績である。

・ウォルネ・アクリウス

フォトス村に住み、その村にある『フォトス学園』に通う小等部4年生で10歳の女の娘。頭脳明晰であり、神童とも呼ばれたが、無口で人間関係が下手なので、友人はあまり居ない。コルト・レイフィールとは、学園の図書室で話し掛けられてから知り合い、親友になつた。水系晶術を得意とし、水系晶術においては、下級晶術から上級晶術まで、全ての晶術を扱える。最近は自分で開発したオリジナルの晶術を制作している。趣味は心理学関係の書物の読書である。

登場人物紹介（後書き）

どうも、作者のMONDOERAです。初めてのオリジナル小説との事なので少し不安もありますが、これまで通り頑張っていきますので、宜しくお願いします。今回は登場人物紹介のみですが、出来るだけ早く更新出来るよう執筆をしていきたいと思います。

・エーテル

夢幻界に存在する謎の物質。人体にも存在する事から、その正体は一種の精神子スピリトロンと言わわれている。生物（高精神体）に潜行する性質を持ち、その生物の許容範囲を超える量のエーテルを取り込んだ場合、凶暴化する。これにより、凶暴化した生物をモンスターと言う。人類は之に対し、エーテルの力を利用して晶術なるものを開発し、モンスターの暴動に備えた。

・晶術

エーテルの力を利用した技術。『火』『水』『電気』『地』『光』『風』の6つの属性に分けられる。それぞれの属性の相性は五行に準ずる。『火』は火氣に属し、『水』は水氣に属し、『地』は土氣に属し、『光』は金氣に属し、『電気』と『風』は木氣に属する。また、それぞれの属性はそれぞれ、五行とは別の2つずつの性質を持つ。

「火」は『炸裂』と『集中』の性質を持ち、「光」は『集束』と『硬質』の性質を持ち、「水」は『流体』と『尖銳』の性質を持ち、「雷」は『拡散』と『閃光』の性質を持ち、「風」は『広域』と『波動』の性質を持ち、「地」は『保護』と『始祖』の性質を持つ。

・五行

中国の陰陽五行思想における、この世に存在する全ての物質の事。五氣とも言われる。火氣、水氣、木氣、土氣、金氣の五つの属性に分かれ、それぞれが一定の性質を持つており、循環する相生と相剋等の関係を持つ。

・夢幻界

正の気により創られし世界の一。主にエーテルによる技術が盛ん。

- ・宇宙始祖の神話

『宇宙生成の初期段階で、正の気が上方に溜まり、負の気が下方に溜まり、それぞれが2つの世界を創った。正の気は、『万象界』、『夢幻界』を創り、負の気は『妖界』と『暗黒深界』を創った。』と伝えられる神話。

- ・神仏騷乱

約20年前に勃発した、神と名乗る者が引き起こした乱。とある4人組によつて解決された。

- ・物質子

この世に存在する全ての物質を粒子として見た単位を物質子^{マトロン}と^{スピリトロン}。精神子の存在が確認されてからこの単語が発生した。

- ・精神子

生物等の精神を粒子として見た単位として、精神子^{スピリトロン}と^{マトロン}。現在この研究が進められているが、まだブラックボックスが多く、解明仕切れていない。

- ・高精神体

動物や人間等の高い精神子含有量を持つ物体の事。靈体^{スピリトロン}や妖怪^{マトロン}が非常に高い含有量を誇り、靈体、妖怪、人間、動物の順に精神子^{スピリトロン}の含有量が多い。

- ・フォトス学園

小等部、中等部、高等部に分かれており、更に武術科、魔術科に分かれている。小等部は武術科、魔術科には分かれておらず、1クラス5、6組に分かれており、6年で小等部は卒業する。中等部から

先是武術科、魔術科に分かれていて、それぞれ3クラスあり、3年で中等部は卒業する。高等部はそのままの科で進み、それぞれ3クラスあり、3年でこの学園を卒業する。

夢幻界の平凡な村、『フォトス村』。そこにはこの夢幻界には数少ない学校があつた。その学校は、『フォトス学園』という学校であり、総勢3872名の生徒が通い、30名余りの教職員が通つている。そして、その学園の小等部4年生の2組に、『コルト・レイフィール』が居た。『コルト・レイフィール』は黒髪のショートヘアをしていて、上は、半袖のトレーナーの下に薄手長袖を着たような服で、下半身は、短パンのジーンズを穿いていた。

「ねえねえ、『交感神経』って知つてる？」

と、コルト・レイフィールがとある友人に訊いた。すると、その友人が応える。

「は？ 何その『交感神経』って？」

と、その友人がコルト・レイフィールに訊き直した。
「いや、あの～、ウォルネちゃんに聽いたんだけど、よく解らなくて。」

と、コルトが言つた。すると、その友人は言つ。

「ウォルネちゃんつて、あの『ウォルネ・アクリウス』の事？」

その友人のその言葉を聽いたコルトは喋る。

「え？ そうだけど。」

そう言つと、友人は言つ。

「あの子、暗くて嫌じやないの。」

と言つと、コルトが反論する。

「暗いんじやなくて、ただ無口なだけだよ。」

と、コルトが言つと、その友人は、

「はいはい。」

と、流した。

やがて、授業が始まったので、コルトは自分の席に着いた。その授業をコルトはあまり聴いてはいなかつた。

45分後、コルトは、同じクラスにいる『ウォルネ・アクリウス』に訊いた。その『ウォルネ・アクリウス』は、青髪のショートヘアで白と赤と紫の色をした長袖を上半身に着ていて、その長袖は、紫色をした袖の所がフリルになつていて、下半身はこれまたフリルの付いたスカートを着用していた。『ウォルネ・アクリウス』は、全体的にヒラヒラした服を着ていた。

「ねえ、交感神経つて結局の所なんなの？」

すると、ウォルネが応える。

「ああ、それは、副交感神経とともに、高等脊椎動物の自律神経系を構成する神経で、脊柱の両側を走る幹から出て、内臓や血管・消化器・汗腺などに分布している神経であり、心臓の働きの促進、血管の収縮、胃腸の働きの抑制、瞳孔の散大などの作用がある神経よ。」

ウォルネがそう言つたが、コルトは解らなかつた。

「いや、あの、もつと解りやすく……。」

すると、ウォルネが説明する。

「えへ、交感神経が優位状態になると、体中に通常より多い血液が全身に送り込まれて、心理状態が高次状態になる。つまり、興奮したり、怒つたりする事よ。」

ウォルネがそう言つとコルトが言つ。

「ん~、なんとなく解つたかな……。」

と、コルトが呟いた。すると、コルトはウォルネの読んでいる本が目に付き、ウォルネに尋ねた。

「ねえ、その読んでる本なんなの？」

すると、ウォルネは応える。

「ああ、これ？これは、心理学の本よ。」

ウォルネはそう応えながら、表紙をコルトに見せた。表紙には、『10歳からの心理学』と書かれてあった。

「ねえ、心理学って面白いの？」

「コルトがウォルネにそう尋ねると、ウォルネは応える。

「うん、私にとつては面白いけど、コルトにはちよつと難しいんじやないかな？」

ウォルネのその言葉を聴いたコルトは、反論する。

「そんな事なつて！ちよつと見せてよ！！」

と、コルトは叫ぶと、ウォルネの本を取つた。そして、パラパラとページを捲り、読んでいった。数秒すると、ウォルネにその本を返して言つた。

「駄目。全然解らない。」

コルトのその言葉を聴いたウォルネは、言つ。

「まあ、この本は、子供向けには出来てないからね。」

ウォルネがそう言つと、コルトがウォルネに尋ねる。

「じゃあ何でウォルネちゃんは、解るの？」

コルトがウォルネにそう訊くと、ウォルネは応える。

「え、それは、まあ、慣れてるからね。」

ウォルネがそう応えると

「慣れてるね・・・。いいなあ頭が良くて。」

と、コルトが言つた。すると、ウォルネが言つ。

「子供の内からそんなに頭がよくても、そんなに良いものじゃないわよ。」

ウォルネがそう言つと、コルトは呟く。

「そういうもんかなあ？」

と、コルトが呟くと、コルトは数秒後、思い出した様に喋る。

「そういうえば。最近ここら辺で人攫いがあるみたいだね。」

コルトがそう言つと、ウォルネがその言葉に応える様に言つ。

「そうね。正しくは88日前から、10歳程度の男女が誘拐されて

いる事件ね。まだ犯人が捕まつていないどころか、依然として犯行は続けられているわ。確認されている段階でも、300人近くの被害者が出ているわ。」

ウォルネがそう言つとコルトが言つ。

「へえ、よくそんな詳しく知つてるね。」

コルトがそう言つと、ウォルネは言つ。

「そんなの常識じゃない。誰でも知つてるわよ。」

ウォルネがそう言つと、コルトは心中で突っ込んだ。

（いやいや、さすがに正確な日付や正確な人数までは知らないでしょ。）

コルトがそう思つた数秒後、始業ベルが鳴つた。

するとコルトは席に着き、授業を受けた。

数時間して、学校の今日の授業が終了し放課後になつた。すると、コルトはウォルネの机を見た。しかし、ウォルネはいなかつた。コルトはバッグを持つと、図書室へと向かつた。

やがて、図書室に到着したコルトは、図書室の中を見渡した。すると、図書室の奥の方にウォルネがいた。コルトは、ウォルネに向かって行つた。ウォルネの目の前まで来ると、コルトはウォルネに話し掛けた。

「やつぱりここにいた。ウォルネちゃん移動するの早すぎ。」

コルトがそう言つと、ウォルネが応える。

「うん、いつも放課後は此処に居るし、此処が一番落ち着くからね。」

ウォルネがそう言つた。コルト達がいる図書室は、小等部と中等部と、高等部の生徒が利用出来る図書室であり、低学年向けの本から、大学の参考書まである、比較的規模の大きい図書室であった。なので、小等部の生徒よりも、大学受験を控えた受験生の方が多いかった。

コルトは、暫く、ウォルネが読んでいた本と一緒に読んでいたが、殆ど解らなかつたので、先に帰る事にした。

「じゃあ、ウォルネちゃん。私そろそろ帰るね。」

コルトはそう言つと、図書室を出ようとした。すると、ウォルネが

コルトの服の裾を掴み、引き止めた。

「待つて、私も帰るわ。玄関で待つて。」

ウォルネがそう言つと、コルトは頷き、昇降口へと向かつた。

一方ウォルネの方は読みかけの本を借りると、帰り支度をした。

数分後、コルトは、昇降口に到着し、ウォルネを待つた。

そして、数分後。

「つつつつ！！」

後頭部辺りに強烈な痛みを感じたコルトはそのまま意識を失った。

暫くして、ウォルネが昇降口に来たが、コルトはいなかつた。

「・・・・・コルト？」

ウォルネはそう呟いてコルトを捜したが、何処にもいなかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8522p/>

ネガティブハネムーン

2011年11月17日05時43分発行